

環境庁委託

第3回自然環境保全基礎調査

# 海域生物環境調査報告書

(全国版)

別添資料

季節別・地区単位データ集計表  
磁気テープ入力形式

1988

株式会社 パスコ



はじめに

本調査は、環境庁自然保護局から調査の委託を受けて実施したものであり、ここに作成した別添資料は、各都道府県で実施された第3回自然環境保全基礎調査、海域生物環境調査におけるコードラート単位の調査結果票を、調査地区単位の一覧表にとりまとめたものである。

本編（「第3回自然環境保全基礎調査 海域生物環境調査報告書 全国版」別途作成）における情報処理業務では、これらのデータを用いて電算機により集計・解析作業が進められた。

データを入力した磁気テープは別途提出したが、本資料には磁気テープへのデータ入力形式についても記載した。このデータが今後実施される調査等の比較・整理の一助となれば幸いである。

昭和63年3月

株式会社 バスコ



## 目 次

I . 季節別・地区単位データ集計.....	1
II . 磁気テープ入力形式.....	2

資 料（季節別・地区単位データ集計表）



## I. 季節別・地区単位データ集計

基礎調査では、概ね春と夏の年2回の現地調査が実施されており、調査地区周辺の概略環境や測線の横断面状況が把握されるとともに、原則として潮上帯、高潮帯、中潮帯、低潮帯の4潮位帯に各3ヶ、計12ヶのコードラートがおかれ、各コードラート内における植物の被度と湿重量、及び動物の個体数と湿重量が記録されている(脚注1.参照)。

本集計表は、これらのデータのうち、植物では被度(脚注2.参照)、動物では個体数(/m<sup>2</sup>)を、地区別・季節別に、高位の潮位帯から生物の出現順に配列し、個々の生物について各潮位帯ごとに合計値と平均値を算出したものである。なお合計値を算出するにあたり、植物の場合、「+」(極めてわずかを覆う)を「0.1」に数値化して計算し、また平均値は、データのバラツキを少なくするため、合計値をその生物が出現したコードラート数で除して計算した(この処理によれば「出現するとすれば、どの程度の出現量になるか」という意味合いが強調されることになる)。

注) 1. 調査方法が多少異なる調査地区とその内容、及び本表での記載方法は次のとおり。

- ・ No.16,67: 植物の被度が記録されてない。→ 湿重量(g/m<sup>2</sup>)を記載
- ・ No.80 : 植物の個々の種類についての被度の記録がなく、全体被度が記録されている。 → ○印で出現したことを示す。
- ・ No.37,38: 4潮位帯が区別されておらず、それらを合わせて「潮間帯」として調査されており、さらに「漸深帯」も調査されている。  
→ そのまま記載
- ・ No.77 : 被度が%表示となっている。 → 被度区分表により被度に変換  
そのほか地区を特定しないが、調査方法が不統一であった事項は次のとおり。
- ・ 陸上の動植物も記録されている。 → それらを除外して記載
- ・ 植物で数種類を合わせた合計被度の記録も含まれている。  
→ }でくくって合計被度を記載
- ・ 動物で群体性の種や個体数の計数が容易でない種の場合、出現量が被度のみの記録となっている。 → そのまま被度を記載(種名に△印)
- ・ 上記と同様に個体数の記録がなく、「出現」または「多数」となっている。  
→ そのまま記載
- ・ 出現量が少ない等の理由により数値を示す数値が記入されていない。  
→ それぞれの調査結果における最低単位の出現量を記載  
(植物では「+」、動物では多くが「4」または「11」)

注) 動物は磯浜・転石浜等では50cm×50cm、砂泥浜では30cm×30cmのコードラートを用いているので、1m<sup>2</sup>当たりの最低単位は、それぞれ「4」、「11」となる。

## 2. 被度区分

被度	区 分 内 容	
5	80~100%を覆う。	個体数は任意
4	60~80%を覆う。	個体数は任意
3	40~60%を覆う。	個体数は任意
2	20~40%を覆う。	個体数は任意
1	20%以下を覆う。	個体数は任意
+	極めてわずかを覆う。	個体数は少ない。

## II. 磁気テープ入力形式

季節別・地区単位データ集計表は、磁気テープへ入力され、本編（「第3回自然環境保全基礎調査 海域生物環境調査報告書（全国版）」 別途提出）において電算機による集計・解析作業に用いられた。

入力した項目は、地区、海岸のタイプ等の調査結果を示す属性、及び出現した生物の種名とその潮位別の平均出現量であり、その入力形式と入力例をそれぞれ表-1、表-2に示す。

なお入力時に、「出現」、「多数」等、他のデータと異なる表示を数値化する必要が生じたが、その数値変換方法を表-3に示す。

表-1 入力形式(植物を例として)

植物・動物の別	調査地区番号	海 区	調 査 期	海岸のタイプ			(内容とコード)				
				外海・内湾等の別	開放・包囲等の別	磯浜・砂泥浜の別	植物・動物の別	調査地区番号	海 区	調査期	外海・内湾の別
A2	I3	A1	I1	I1	I1	I1	種 名	潮上帯	高潮帯	中潮帯	低潮帯
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1
種 名							A30	F8.1	F8.1	F8.1	F8.1

- 注) 1. 潮上帯～低潮帯の各数値は、季節別・地区単位データ集計表における各潮位帯の平均値である。  
 2. 動物の場合、潮上帯～低潮帯の各数値の形式は、I8である。



表-2 入力例(植物を例として)

PA001A1111				
タマシ <sup>レ</sup> ユス <sup>レ</sup> モ	0.1	0.1		
ヒ <sup>レ</sup> リヒ <sup>レ</sup> ハ <sup>レ</sup>		1.0	2.3	1.0
フシ <sup>レ</sup> マツモ		0.1	0.1	
モツレク <sup>レ</sup> サソ <sup>レ</sup> ク SP.		0.1		
イホ <sup>レ</sup> ノリ		0.1	0.1	0.1
ネハ <sup>レ</sup> リモ		0.1	0.1	
フクロフノリ		5.0	1.0	
エソ <sup>レ</sup> ツノマタ		0.1	0.1	
ソソ <sup>レ</sup> ソ <sup>レ</sup> ク SP.			0.1	0.1
アカハ <sup>レ</sup>			0.1	0.1
アカハ <sup>レ</sup> キ <sup>レ</sup> ンナンソウ			0.1	0.1
キタイウヒケ <sup>レ</sup>			0.1	0.1
ナカ <sup>レ</sup> マツモ			0.1	
マツモ			0.1	
イキ <sup>レ</sup> ス				0.4
アナアオウ				0.1
ハネイキ <sup>レ</sup> ス				0.1
ハケサキノキ <sup>レ</sup> リヒ <sup>レ</sup> ハ <sup>レ</sup>				0.1
ウミソ <sup>レ</sup> ウメン				0.1

表-3 数値変換方法

内 容	変 換 方 法
植物の被度が記録がなく、湿重量 (g/m <sup>2</sup> ) の記録となっている。	最小単位の「0.1」に変換
植物の個々の種類についての被度の記録がなく、全体被度が記録されている。	それらの全ての種を最小単位の「0.1」に変換
4潮位帯が区別されておらず、それらを合わせて「潮間帯」として調査されており、さらに「漸深帯」も調査されている。	中潮帯の数値として入力。なお漸深帯の数値は入力しなかった。
植物で数種類を合わせた合計被度の記録となっている。	それらの全ての種をその合計被度の数値に変換
動物で群体性の種等の出現量が被度の記録となっている。	「1」に変換
動物で出現量が「出現」または「多数」となっている。	「1」に変換

注) 動物の被度表示や「出現」等の表示は、実際の個体数がかなり多いことを意味しており、ここでは特異数値として「1」を入力した。動物のデータはこのほかに「1」という数値はない。なお後の電算機による集計作業では、「1」は特別に扱い、平均値の算出等から除外した。

